

平成 22 年 12 月 16 日

「今後の高校教育のあり方」への提案

彩の国子ども・若者支援ネットワーク
代表理事 青砥 恭

2008 年の春から、高校中退者が多い大阪、埼玉など関東近県を歩き、高校を中退した若者、貧困世帯の高校生、教師、親、福祉関係者などから聞き取り調査をした。高校を中退した後の若者たちは日本社会の最底辺で生き、マージナル・パーソン化していた。

しかし、現在の日本の学校と教育はさらに不平等を再生産し、子どもを貧困と社会的排除から守っていない。格差と貧困が深刻な社会問題となった日本社会に教育制度が対応できていないように思われる。

調査の結論は次のようなものである。

高校を中退する高校生は毎年 10 万人にもなり、その年に在籍する同学年の生徒の 9% ほどにもなっている。中卒後、高校中退後の若者たちの実態調査を行うべきである。中退した高校生の背景には深刻な貧困があった。若者たちの貧困は親の代から続き、不安定雇用と低賃金による貧困の連鎖の中からつくられたものだった。生活不安の中で、幼児期から DV・虐待・ネグレクトを体験していた。

家庭の経済資源のなさ（貧困）と親の子育てに対する意欲のなさが、子どもの市民性や社会性だけでなく学力の育成を阻害している。とりわけ、幼児期における親からのコミュニケーションの少なさが子どもの言語能力など発達を阻害している。

貧困が子どもの学ぶ意欲だけでなく、働く意欲、人とつながる意欲（関係性）、自分の未来をつくろうという「生の意欲」までも失わせ、多くの人たちとの関係性を断たせ、社会からの排除現象を生んでいる。

貧困は友人関係を育てる上でも阻害要因になっている。社会的一体感、帰属感、人間関係をつくるスキルを発達させることが出来ず、友だちの少なさが、「いじめ」を受けられる原因にもなっている。

多くの高校中退した若者たちには、まともな就業チャンスもなく、将来の生活をデザインする「ゆとり」をつかめていない。結果として日本社会の最底辺に生きている。学区制の縮小や解消によって、社会階層と連動した学校序列（トラック）が形成され、日本の教育制度は不平等を再生産し、親の資産のみならず、親の貧困をも相続させている。

貧困で低学力の生徒たちが最底辺校に「囲い込まれ」、高校教育（教育）の階層移動機能はすでに失われている。

この 10 年間の経済不況は貧困層にもっとも打撃を与えたが、中間層の解体も進み、貧困層を拡大した。

《家族の貧困 - 低学力 - 不登校 - 高校中退 - 教育・雇用からの排除 - さらなる貧困》という子どもの貧困の連鎖がこの 10 年でいっそう鮮明になった。

幼児期から脆弱な家族資源の中で育ち、人間として発達するための文化的な生活から無縁に生きてきた子どもたちが学校や社会から切り離されて生きている。全国学力テストの学校の平均点がその就学援助率と強い相関があることが文科省の調査でも明らかになっているが、地域によっては就学援助率が 50%を超える学校すらある。しかし、この学校間格差、地域格差はいっそう拡大し続けている。不平等を再生産する今の学校システムでは貧困層の子どもたちは生涯、貧困と孤立の中から抜け出せない。困難を抱えたすべての若者断ちに、多くの人たちとつながることの出来る居場所をつくり、遊び、学び、生活の訓練を保障し、若者が地域社会で生きていけるための新たな社会、教育システムのあり方、「学び直し」の場を設けることを検討する必要がある。日本社会の分裂を防ぐには、子どもと若者たちの貧困化を防ぐ取り組みが重要である。

[居場所づくり]

第 1 に、高校を中途退学した若者、中卒で居場所のない若者、小中から不登校の子どもたちの居場所づくりとサポート（相談相手）できる地域市民、学生を中心とする家庭、学校に次ぐ第 3 の居場所づくりが必要である。居場所の役割は、自分で日頃の生活での健康管理ができる日常生活の自立、就労による経済的自立、社会的つながりの回復・維持をめざす社会的自立などのトレーニングの場であり、ネットワークをつくる場である。

[教育から就業へ]

第 2 に、高校教育に教育と就業をつなぐ機能を強めることが必要である。具体的には、地域の産業と関連性の強い技能を重視した高校教育に再編することを検討すべきである。地域の企業の人材を職業教育の場に生かし、そこで学んだ生徒を地域の人材として育てる、そういう地域連携、産学連携が必要である。

[中退を防ぐ学び直し]

第 3 に、高校中退は子どもの生涯にわたる貧困を決定づけている。高校中退を防ぎ、一時的に学校を離れようが、いつ戻ってきても学べる場づくり、高校の「学び直し」機能を設けるべきである。中等教育の間にすべての子どもたちに、読み・書き、基本的な計算力をつける。生活能力と考えるべきである。

[補習学級]

第4に、放課後の学校、児童館、公民館など（地域子どもセンター）で、学生、退職教員、地域のボランティアの力を借りて学力の補充が必要な子どもたち・生徒たちを対象に無償の「補習学級」を設置する。その際、困難な子どもの1本釣りではなく、地域の仲間のコミュニティ・ネットワークが必要である。様々な困難を、地域の若者たち、学校の同級生のつながりで、不安定でも、何とか乗り切っていくことができる。

[教員養成]

第5に、教員養成制度を、4年間は大学で、次の1年間は、半期は学校で、残る半期は地域で地域のボランティアらとともに「補習学級」などを担当し、地域の住民や多様な文化を持つ人々との交流体験は、教育現場で親や地域の住民との交流に必要である。

[就学援助]

第6に、高校にも就学援助制度が必要である。授業料の無償化だけでは、貧困層には今の高額な教育費はまかなえない。

[学校に教育的機能と福祉機能を]

第7に、学校に教育的機能だけでなく福祉的機能を持たせることを検討すべきである。まず、様々な困難を抱える子どもたちの情報は、学校・福祉機関、その他の行政機関、地域の市民団体（NPO）で共有すべきである。

[子どもの貧困を学校の力で]

第8に、子ども・若者の貧困を防ぐには、学校の力こそ必要である。そのためには学校は最大の社会資本である。家庭の貧困など子どもの実情を知る地域の学校で対応すべきである。

[福祉と教育と地域をつなぐネットワーク]

第9に、子ども・若者たちを貧困から守るネットワークを学校、福祉機関の連携で張りめぐらせることが必要である。内閣府が昨年、「子ども・若者育成支援推進法」を公布し、今春から実施しているが、本来は、教育の役割も大きいはずだが、教育機関が参加していない。

中学校を拠点として、学校、保育所、福祉事務所、児童相談所、教育委員会、地域の自立支援組織、スクール・ソーシャルワーカー、保健師など困難な家庭の親たちの子育てと子どもの社会的自立のために、各機関の連携した取り組みと利用者が相談しやすいネットワークづくりが喫緊の課題となっている。

[ケース会議]

第10に、問題を抱えた子ども、親に対する支援、情報交換・対策会議（ケース会議）を定期的に行うことが必要である。

[地域子どもセンター]

第11に、孤立した子育てをしている親、とりわけ一人親家庭の親に対する相談、支援が必要である。夜間の学校、公民館などを利用した、親たちも気軽に寄っておしゃべりができるようなたまり場、子どものたまり場ともなる「地域子どもセンター」を設けることが必要である。

[まず、貧困世帯の支援から]

第12に、生活保護世帯、就学援助受給世帯、一人親世帯などの子ども、外国国籍の子どもの中に、小学校段階で学力的に平均児童より低く、小学校・中学校で学習を忌避し、中学で不登校、高校で中退する事態が発生している。小学校段階から基礎的な学力保障をすることが必要である。

[給食費などを国庫負担に]

第13に、外部化されている小中学校の給食費、教科書費などは国庫負担にすべきである。高校生などにも給付型の奨学金制度を充実させることが必要である。

[定時制の統廃合の再検討]

第14に、定時制の統廃合は再検討すべきである。貧困で低学力の子どもたちの行き場がなくなり、子どもや若者たちがコミュニティ・ネットワークを得る機会を失うことにもなる。

[教育の私費負担の見直し]

第15に、大前提として、教育が私費負担という制度自体の見直しがなんとしても必要である。世帯収入が400万円以下の世帯（全世帯の約40%）では、教育費が60%を占めるといふ状況は深刻である。

高校教育改革に関する提案のための補充資料

「格差・貧困社会に生きる子どもたち」

彩の国子ども・若者支援ネットワーク

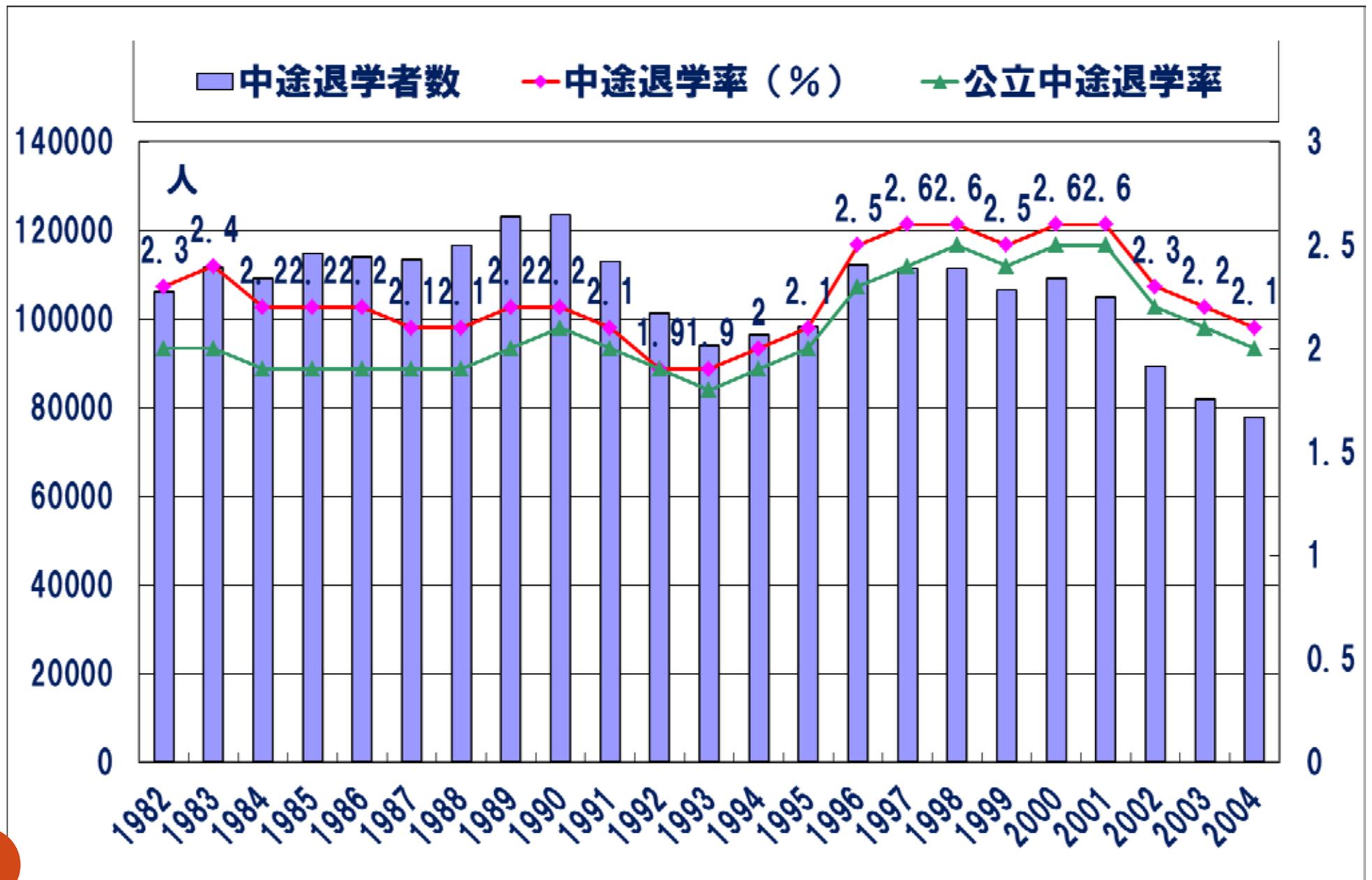
青砥 恭

社会階層と学校序列

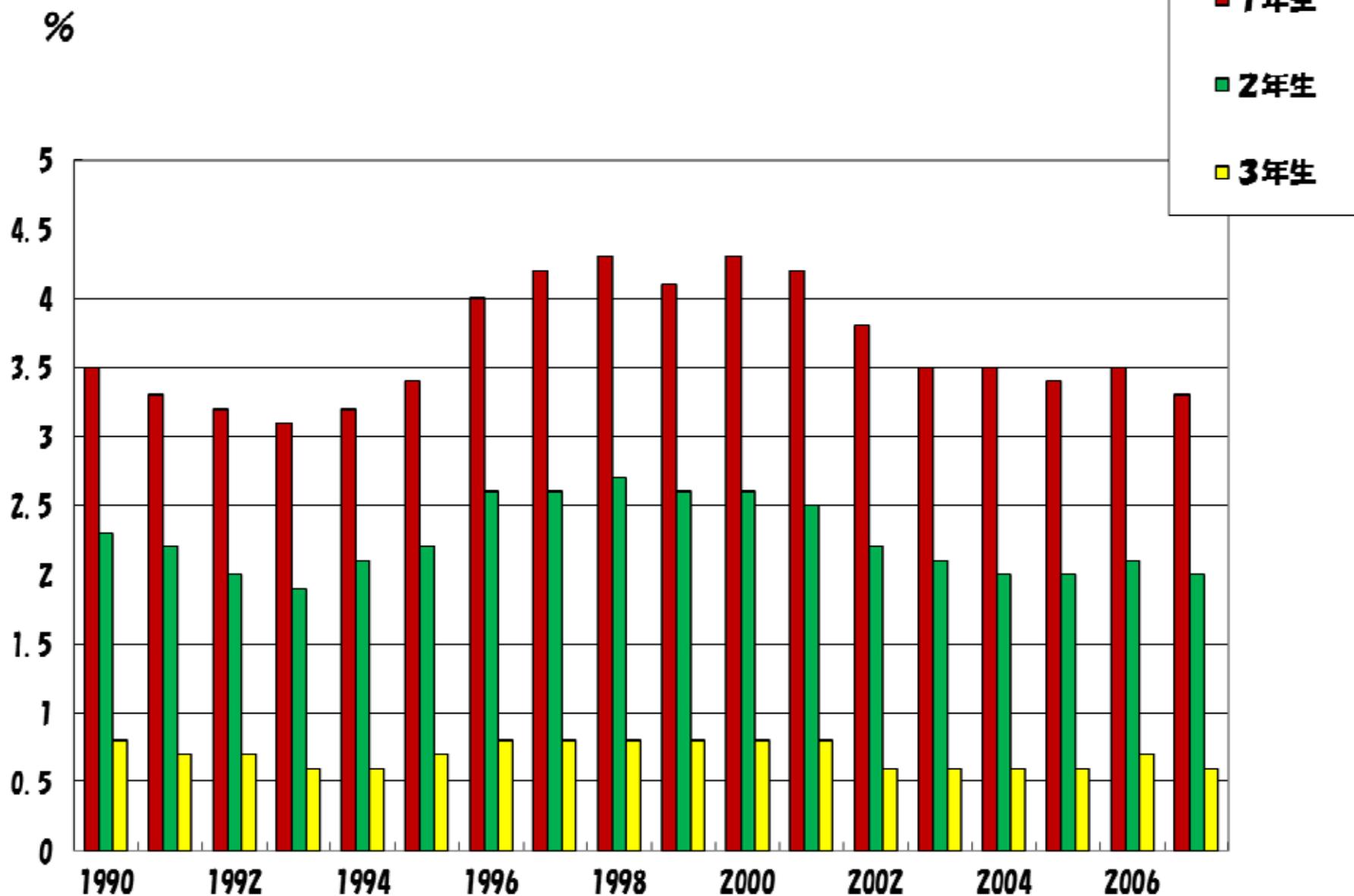
高校中退 10万人

家族の貧困 低学力 底辺校
中退 無業・アルバイト
どんな学校で 底辺校

文科省が調べた高校中退率



2007年度までの学年別中途退学率の推移（全国 文科省調査）



高校中退率（上段は2005年入学 下段は2006年入学）

	5月1日在籍数	卒業者数	中退者数(減少数)	中退率(減少率)
北海道	52669	48189	4480	8.5
	51916	47293	4623	8.9
埼玉県	59844	54049	5795	9.7
	58642	53140	5502	9.4
東京都	106097	96560	9537	9.0
	103525	96165	7360	7.2
神奈川県	65303	59489	5814	8.9
	64789	59025	5764	8.9
大阪府	77857	67575	10282	13.2
	77283	66940	10343	13.3
沖縄県	17497	15638	1859	10.6
	16808	14792	2016	12.0
2005入学	1183689	1088170	95519	8.1
2006入学	1157291	1063581	93710	8.1

埼玉県立K高校2004年度 入学者の中退数・率と不登校数・率

	入学時での生徒数	1～3年生 で中退した 数(人)	卒業生数 (人)	中学で不登 校を経験し た数(人)	中学で不登 校で中退 (人)	備考
1組	33	13	19	7	5	死亡1名
2組	33	17	16	8	7	
3組	33	14	19	4	4	
4組	33	12	21	5	5	
5組	34	9	25	9	6	
6組	33	20	13	8	8	
全体	199人	85人 (43%)	113人 (57%)	41人 (21%)	38人 (84%)	

長欠・不登校経験生徒の内、100日以上
の長欠・不登校は17人。

埼玉県南部中学（2）

2009年度卒業	生徒数	就学援助・ 生保	生保・就学援助 受給生徒が 占める割合 (%)
	353	64	18.1
公立全普	215	31	14.4
公立全職	15	10	66.7
私立普	83	6	7.2
公立定時	14	7	50
公立通信	3	3	100
私立サポ - 卜校	8	0	0
特別支援	4	2	50
就職	4	4	100
国立専	3	0	0

虐待・ネグレクトを体験した中退した生徒たち

「子どもの頃の思い出？ そんなものない。

たたかれたことだけしか憶えていない」

「家族のことなんか、思い出したくない」

「小学生のころから親と一緒にご飯食べたことない」

「食事の時、うちにはテーブルがなかった」

貧困と学習環境のなさによってつくられる低学力

低学力

「小学校のときから、勉強はついて行けなかった」

「二桁の足し算、できないんです」

いじめ・不登校 「あいつ、来たよ、って言われてから、学校に行けなくなった」

友人関係は社会的孤立から回避
するうえで大切な社会的機能を果たす

教師と学校の支援

「高校やめるとき、先生も止めてくれなかった」

中退後は学校とは無縁に

中退 = 無業

「高校やめたら、仕事ないです」

学校の格差が子どもから意欲を奪っている

「うちの学校はバカ学校だからつぶされるんだ」

「入った学校は、思ったよりひどかった」

「ぼくは、こんな高校に入ったんだ」

差別感

友人関係の重要性 = 社会関係をつくるスキル
他者への理解 社会的な一体感、帰属感

「生徒は行き場がなくて学校に来ている」(教員)

美保は19歳で母親になった

実父のDV 家庭崩壊 母の実家へ
義父による虐待 母から捨てられる
叔母や叔父からの虐待 養護施設へ
脱走、男の家を転々
高校中退 風俗店へ 出産
子捨て

大人に対する不信 自分の子への愛情？